

中國出土資料學會
平成27年度第1回例会

日 時：平成27年7月18日（土）

平成27年度第1回例会

受付開始 12:30～

研究報告 13:00～17:00

場 所： 北海道大学札幌キャンパス 人文・社会科学総合教育研究棟（W棟）

W308教室（札幌市北区北10条西7丁目）

会場へのアクセス： JR札幌駅北口から徒歩12分

地下鉄南北線北12条駅から徒歩5分

報告Ⅰ 角道 亮介（駒澤大学文学部歴史学科講師）

発表題目：西周青銅器銘文からみた祭祀行為の変容

発表概要： 西周時代の青銅彝器のうちには、その銘文に祖先を祭るための器であることを明記する例が多数あり、これらの彝器の本質的な用途は宗廟における祖先祭祀であったと考えられている。このように銘文資料はその性格上、祭祀行為と密接に関連しているはずであり、有銘青銅器の出土状況への検討は当時の祭祀行為の一端を解明するための重要な手がかりである一方で、これまでの研究では副葬品の一要素としての青銅器銘文が被葬者の属性との関係の中で検討されることは少なかつた。本発表では青銅彝器所有者の身分・性別という点に着目し、王朝の中心地域であった関中平原や諸侯国地域から出土した青銅器資料を検討対象として、西周期における祭祀行為の変容、特に祭祀が一部の人々に独占されていく過程について考察を加えたい。

報告Ⅱ 西 信康（北海道大学文学研究科専門研究員）

発表題目：郭店楚簡『太一生水』の思想

発表概要： 郭店楚簡『太一生水』は、一九九三年に中国湖北省にて発掘された竹簡資料である。そこには、「大一」、「水」、「天」、「地」、「神」、「明」、「陰」、「陽」、「四時」、「湿」、「燥」、「歳」等の語が確認され、これらが順次「生」「成」される関係として記述される。本発表では、これらの語を含む前後の表現形式を改めて分析する。併せて、それらが他文献において言及されるときの上の思想上の問題意識を解明する。これにより、『太一生水』に描かれる万物生成の具体的な様相を把握する。また、当文献は、その前半部と後半部とで思想の主題が異なることや、竹簡の形態が郭店楚簡『老子』丙本と同一であることが指摘される。このため、文献としての独立性や、『老子』丙本との関係も議論される。これについても、見解を提示したい。

報告Ⅲ 曹 峰（中国人民大学哲学院教授）

発表題目：清華簡『殷高宗問於三壽』研究

発表概要： 『殷高宗問於三壽』は『清華大學藏戰國竹簡（伍）』の中で最も長い文獻で、難讀で有名である。前半部分は、殷の統治を長く維持する方法について殷高宗と少壽・中壽及び彭祖の間で行われた問答である。後半部分は主に彭祖が殷世の混亂に對し述べた九條の政策であり、即ち「祥・義・德・音・仁・聖・智・利・信」である。最後の部分は民性に「揚」と「晦」があることについて述べている。

本報告は幾つか難讀の部分を読解し、全文の大意を疏通したうえで、その思想性質を判断したいと考える。整理者李均明氏は、『殷高宗問於三壽』の思想は主に

